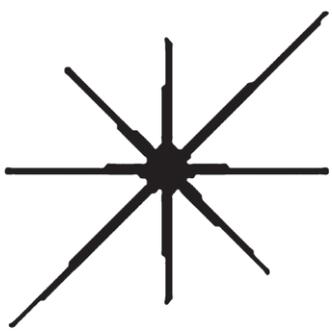
コメット通信 40

［’23 年 11 月号］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集　アラン・バディウ】
バディウの著作とその背景について
近藤和敬――――――――――3

過剰の脱共有
――『主体の理論』から『メタ政治摘要』までのバディウ政治論瞥見
松本潤一郎――――――――――5

バディウの芸術論と「併走者」たち
武田宙也――――――――――8

アラン・バディウ書誌抄――――――――――10

【連載】
ジュリアス・イーストマンのミニマリズム（2）：パーソナルなミニマル音楽
――ミニマル音楽の拡散と変容 9
高橋智子――――――――――13

【特集　アラン・バディウ】

バディウの著作とその背景について

近藤和敬

バディウは現在 86 歳だが，その活動はいまなお盛んで多岐にわたる。英語圏では彼の思想は様々な批判とともに受容され，彼の芸術，政治，科学，哲学といった様々な活動について非常に多くの論文や著書が書かれ続けている。彼の活動というのは，もちろん哲学教育がその中心にあるのだが，目立つものだけにかぎっても，戯曲，小説の執筆や，政治的時事批評の執筆，非美学と命名された美学批評など多岐にわたる。サルトルの影響を受けて哲学の道へと進んだバディウは，1960 年代はアルチュセール派（マシュレイ，バリバール，ランシエールなど）とラカン派（ミレール，ミルネール，ドゥルーなど）の双方との近い関係で知られ，『分析手帳』（1966-1968 年，全 10 巻）の 9 巻と 10 巻でそれぞれ論文を寄稿し，それらでは編集に近い仕事もしている。また 1968 年から 80 年代にかけてはフランスのマオイスト・グループ（マルクス － レーニン主義フランス共産主義者同盟 UCFML）としても活動しており，この点についても現在に至るまでさまざまな批判がなされてきた。また 1960 年代末から 90 年代までドゥルーズもいたヴァンセンヌ実験大学にフーコーらとともに創設からかかわり，90 年代末からは高等師範学校の教授として，カンタン・メイヤスーらの世代に多大な影響を与えた。また先にも触れたように 1960 年代からラカン派精神分析を批判的に受容しており，ラカン派とは異なる独自のラカン解釈も展開している。

バディウは，『存在と出来事』，『諸世界の諸論理――存在と出来事 2』，『諸真理の〈内在〉』という 3 冊の体系的主著によって自身の独自の哲学体系を世に問うた。『分析手帳』の論文「記号と欠如――ゼロについて」など初期の論考では，同時代の数理論理学の進展をふまえた議論（たとえばゲーデルの不完全性定理についてのスマリヤンによる再構成について）を行っており（ミレールの「縫合」論文を批判するためにかなり独特のラカン派的用語法で論じられてはいるが），またこの当時，バディウは数学におけるモデル理論や形式意味論のエピステモロジーを試みてもいる（『モデルの概念』1969 年）。このような経緯のなかで，バディウは独自の数理哲学の傾向性を生み出していく。この傾向性は，必ずしも当時のフランスの正統派と考えられていた議論の枠組み（たとえば，ジャン = トゥサン・ドゥサンティやジル = ガストン・グランジェらのそれ）と一致するものではなく，独自性の高い枠組みを構築していくことになる。この成果となるのが，集合論，とくにコーエンによる強制法をもちいた選択公理の独立性証明の議論を下地として，それを独自の哲学体系へと移し替えた『存在と出来事』（1988 年）である。

バディウはドゥルーズを存在論的ファシズムとして批判したこと（『ドゥルーズ――存在の喧騒』1997 年）や，ヴァンセンヌ時代にドゥルーズの講義の妨害行為を行ったことなどでも知られているが，しかしバディウの哲学的内実をみてみると，実のところドゥルーズ哲学のバディウなりの批判的再構成という側面をそこに見出すことができるように思われる（このことはバディウが『アラン・バディウ，自らの哲学を語る』（2020 年）でも繰り返し論じているように，ドゥルーズの哲学と自らの哲学とを同じカテゴリーのうちに置いているということではない。バディウにとってドゥルーズの哲学は関係主義，生気論，生の哲学であり，彼自身の哲学は物質概念の批判を経由した唯物論の哲学である）。むしろ，バディウはドゥルーズを関係主義の哲学としたうえで，『諸世界の諸論理』においてそれを

自身の哲学の枠組みのなかで位置づけなおしているともいえる。

バディウは，存在とは多であるか一であるかであって，存在がもし一であるならば，神学が存在論となり，多であるならば，数学とりわけ要素を前提とする集合論が存在論であることになると主張する。それにたいして，「出来事」は，このような存在とは異なるもの，存在の空白，存在論においては識別不可能なゾーンにおいて生じるとして，「存在」と「出来事」を明瞭に区別する（『存在と出来事』）。「出来事」とは，バディウにとって「真理の過程」であり，それによって実際には「存在」と呼ばれるものが開示される。そうであるがゆえに，哲学は，存在論を数学の側に肩代わりしてもらうことで，「真理の過程」である「出来事」と「存在」のあいだにおいて，自らを条件づけることになる。

バディウは哲学とは，四つの「真理の過程」すなわち科学，芸術，政治，愛という四重の仕方で条件づけられると主張している。なぜ哲学は四つの「真理の過程」によって条件づけられるのか。それは，哲学はバディウにとって根本的にはある行為であって，対象として獲得される知ではないからだ（この点においてもバディウはドゥルーズに近い）。哲学は，状況にコミットすることで可能になる思惟の行為であり，それは主体性を不可欠なものとする（これがバディウにとっての「選択」と「忠誠」という主題を要請することになる）。

『アラン・バディウ，自らの哲学を語る』では，自らの立場を数ある哲学的選択の一つの帰結として描きだし，自らのコミットした「選択」に忠実に思考を展開することこそが，哲学者の使命であると述べるにいたる。バディウにとって，唯一の実体としての哲学的真理があるのではなく，出来事に条件づけられ，それにコミットするという条件のなかで展開される思考の多数の道程があることが認められる。その道程は，それにコミットする哲学者の行為によって共同的に実現されていく。この意味で，バディウは最終的に彼が最初の師と仰ぐサルトルの哲学に帰ってきたのだということもできるかもしれない。

執筆者について——

近藤和敬（こんどうかずのり）　1979 年生まれ。現在，大阪大学大学院人間科学研究科准教授。専攻＝哲学・哲学史。小社刊行の主な訳書には，アラン・バディウ『推移的存在論』（2018 年），『アラン・バディウ，自らの哲学を語る』（2023 年）などがある。

【特集　アラン・バディウ】

過剰の脱共有

――『主体の理論』から『メタ政治摘要』までのバディウ政治論瞥見

松本潤一郎

バディウは『主体の理論』（1982）5 章「主体化と主体の過程」最終節「過剰の論理（1978 年 5 月 15 日）」において，政治的主体を論じる文脈でカントールの連続体仮説に言及する [(1)]。この仮説と主体化の関係はどのようなものか。

バディウにとって政治はつねに解放を目指す意志と思考と行為であり，具体的には異議申し立て，抵抗，反乱，蜂起，そして革命といった諸要素から成る。この方針から，彼は移民労働者を支える運動に関わってきた。国家 l'État が承認しない限り，移民は「存在」しない。ここで「存在する」とは，移民が領土内の一定の空間あるいは場所を，物理的かつ象徴的に（書類上の文字列として）占めることである。『存在と出来事』の「状況の状態 l'état de la situation」概念はこれを指す [(2)]。集合（多）は諸要素を「一」と数える操作から発生する。状況には様々な要素から成る諸々の多，多の多がある。状態＝国家はそれら多の間の差異・同一性・諸関係を一覧して，多を分類・整序する。移民は「移民」という名の多（集合）へ分類され，国家へ登録されるだろう。領域内の一角を占めること，場を確保することに，移民労働者の主体化は尽きるだろうか。そうではない。解放政治の展望からすれば，移民労働者の蜂起はその周囲へ波及して，移民労働者と連帯・協働するフランス人労働者の国民アイデンティティにまで揺さぶりをかけ，一国内部を超えたプロレタリアートの国際的な団結へと開かれうる。その意味で主体化は空間・場所へ還元されない。これが節のタイトルにある「過剰」，登録された「存在」の場所から溢れ出す過剰な力であり，解放政治の原資である。

この力を，バディウはカントールの定理を通して理解する。任意の集合に対して，その集合の全ての部分集合の集合（冪集合）は，その集合より濃度が大きい。ある集合に新たな要素を付け加えるには，その要素が占める空き場所を一対一対応の形式で後続的に次々と設けていき，そこに新たな要素を置いていく必要がある。こうした空き場所の割り当てでは間に合わず，それを優に凌ぐ濃度が，当初の集合の冪集合の中にすでに含まれる場合もある。このとき過剰は，言わば部分に宿る。それもどの場所（部分）に過剰があるのかを特定できずに。連続体仮説はこの点に係わる。

全ての自然数の集合 A は可算無限だから A の部分集合の要素も可算無限であり，一対一対応で要素を漏れなく確定することができる。しかし A の冪集合 B は非可算無限であるため，その一部しか要素を確定することはできない。B の無限部分集合 C のうち，A とも B とも一対一対応で洩れずに要素を確定することができない集合だけを集めて集合 D とすると，D は B のさらなる冪集合 E の部分集合になる。このとき〈D は空集合である〉という命題が，連続体仮説である。ゲーデルは，通常の集合論の公理系（いわゆる ZFC 公理系：以下 ZFC）に矛盾がなければ，同公理系へ同命題を公理として付加しても矛盾は現れないと証明した。コーエンは，同命題の否定命題の付加も，同じく同公理系で矛盾を来たさないと証明した。同命題の肯定も否定も成り立つため，連続体仮説は ZFC に対して独立的である。E と D にはこうした不思議な事態をもたらす集合が含まれる。これが部分における不定な過剰である。

連続体仮説証明のため，ゲーデルは過剰の統制を図る。彼は諸部分集合の集合を構成する際，前の段階ですでに構築された部分集合のみを用いて次の段階の集合を後続的に定義した。このように構成

された集合は，単一特性を持つ諸部分集合から成る入れ子状の厳密な階層構造となる。

コーエンはZFCにおける集合論モデルへ，過剰な部分から新たな要素を付加して拡張させ，拡張されたモデル（ジェネリック集合）が成り立つことを示した。過剰な部分の中には，ZFC内では作り出せない理解不可能な要素もあるだろう。こうした〈外〉の要素からZFC内の演算を適用できる要素のみを集め，それらに対して演算を施しても矛盾が出ないことを示す――大雑把に述べるとこのようなアイディアをもって，コーエンは証明に取り組んだ。そうした要素を集める技術が強制法である。直観的に述べると（正確ではないが），前述した要素のみを抽出するために，それ以外の要素を複数の条件を重ねながら集めていき，その後で逆に，ZFC内で演算可能な要素を，言わば補集合に包囲されて浮かび上がる集合のように，輪郭を描き出して反転的に取り出すようなイメージかもしれない。強制法によって促成された集合の諸要素を特定・局所化することはできず，存在していることしかわからない。蜂起の「否」は特定条件，例えば一定の領土に場を定めることには限定されない。それは絶対的特定の不在によって,「強制」されているのである。後の『存在と出来事』において，強制法はバディウ哲学の要になる。

さらに後の『メタ政治摘要』（1998）10章「真理の手続きとしての政治」において，過剰はその地位を変える[(3)]。それはむしろ国家権力の遍在性と不確定性を指すようになり，そして政治（あるいはメタ政治）は国家のこうした過剰権力を測定し形象化する試みと規定される。敵の輪郭を正確に見定め，その力を的確に測ることから政治は始まる。このように政治を捉えなおしたうえで，『存在と出来事』第2巻『諸世界の諸論理』（2006）発表後，バディウはコミュニズムの理念を検討し，再提起する作業へ入ってゆく。過剰の地位が転位した理由を，最後に考えたい。

先に諸々の多を分類・整序する国家の機能に触れた。これは現前する多を再び現前させる表象（再現前化）の操作である。その意味で状況の状態は状況の全部分集合の集合であり，つねに状況の集合を超過する。国家は状況の冪集合であり，状況に現前する多を表象して，多へ権力を行使する。権力は部分の過剰である。すでに見たように過剰は不定であるため，権力はいつどこに現れるか確定されない。そのためつねに監視されているという感覚を私たちに植えつける。

『主体の理論』の時点では，プロレタリアートの蜂起は国家権力奪取とそれに継ぐ国家の廃棄というマルクス主義の方針に沿って捉えられていた。転位というよりもむしろ，主体と国家は過剰を共有していたのである。他方,『メタ政治摘要』にこの方針は出てこない。国家の掌握よりも，いかにして国家から隔たるかを問うている。（バディウの友人ジジェクはこの点，バディウに批判的である。）冷戦解体などの事情により，国家権力奪取路線は失効したと判断したのかもしれない。その後バディウは，現実の具体的政治を考察するよりも，先述の通りコミュニズムの理念の検討の方へ傾注していく。この方針転換と過剰の評価変更は無縁ではない。その経緯は別稿へ譲り，変更の徴候のみを指摘したところで本稿を閉じたい。

注

（1） Alain Badiou, *Théorie du sujet*, Paris, Éditions du Seuil, 1982, pp. 281-290.

（2） Badiou, *L'Être et l'événement*, Seuil, 1988, pp. 109-128.

（3） Badiou, *Abrége de métapolitique*, Seuil, 1998, pp. 155-167.

執筆者について——

松本潤一郎（まつもとじゅんいちろう）　1974 年生まれ。現在，就実大学人文科学部教授。専攻＝フランス現代思想・文学理論。小社刊行の著書には，『ピエール・クロソウスキーの現在——神学・共同体・イメージ』（共著，2020 年），訳書には，コスタス・ドゥズィーナス＋スラヴォイ・ジジェク編『共産主義の理念』（共訳，2012 年）がある。

【特集　アラン・バディウ】

バディウの芸術論と「併走者」たち

武田宙也

アラン・バディウの芸術論にとって，18 世紀末以降の，いわゆる「ロマン主義」の芸術は大きな問題であり続けている。『非美学への手引き』（1998 年，邦訳:『思考する芸術――非美学への手引き』）においてバディウが，芸術と哲学との結びつきをめぐる三つのシェーマ（「教育主義」，「ロマン主義」，「古典主義」）に代わる第四のシェーマとして「非美学」を提示したことはよく知られている。

上述の三シェーマのうち，彼が主な標的とするのはロマン主義のそれであり，とりわけ俎上に載せられるのはロマン主義における有限と無限の関係である。バディウはロマン主義を，芸術を有限への無限の降下という受肉化モデルで捉える「美学的宗教」であるとして批判し，これに対して，有限と無限との「別様の連関」を探究する。たとえば，作品を芸術の単位とみなし，この有限な存在の中に無限の降下を認めるロマン主義に対して，バディウの非美学においては，芸術の単位として（つまり，無限の発現する場として），作品に代えて「芸術的過程」というプロセスが措定される。また彼は，イベント，ハプニング，即興といった「演劇的な偶然」に依拠する 20 世紀のパフォーマンス・アートの中に，有限から直接たち現れる無限を見て取る。このようにバディウの非美学は，ロマン主義を歴史的な問題としてのみならず現在進行系の美学的課題として捉え，それに対するオルタナティヴを提示する点に特徴がある。

一方で，バディウと同じくアルチュセールや毛沢東主義の影響下に思想形成し，その政治哲学がしばしばバディウと比較されることもあるジャック・ランシエールは，ロマン主義以降の芸術のあり方に別の観点からアプローチしている。バディウが芸術と哲学の結びつきをめぐる三つのシェーマを提示したのに対して，ランシエールは芸術と政治の結びつきをめぐる三つの体制（倫理的体制，表象的体制，美的体制）を提示した。このうち彼が最も重視する美的体制は，時代的にも内容的にもロマン主義とおおよそ重なる。ランシエールによれば，この時期の芸術の最大の特徴は，それを主題やジャンル，そして諸芸術間のあらゆるヒエラルキーから解き放った点にある。芸術におけるジャンルやメディウムが，いかなるヒエラルキーからも自由に，さまざまな形で「混交」するようになったここ 2 世紀ほどの状況をランシエールはポジティヴに捉えている。バディウとランシエールは，前者が主に哲学との関係から，後者が主に政治との関係から芸術を位置づけようとする，という立場の違いはあるものの，いずれも 18 世紀末以降の芸術の状況をアクチュアルなものとして引き受けている点では共通する。ただし，上で確認したように，両者がそこに見出す関心は交わることがない。ランシエールは，上述したような諸芸術の混交を重視する立場から，バディウの非美学のモダニズム的な純粋主義を批判するものの，それに対してバディウは明確な反応を示さず，「論争」はすれ違いに終わっている。

ジャン＝リュック・ナンシーとフィリップ・ラクー＝ラバルトは，1978 年に初期ロマン主義者のテクストを翻訳・注解した『文学的絶対』を共著で執筆しているが，たとえば本書を契機として，その後ナンシーはロマン主義者たちの断章形式の著述スタイルから『無為の共同体』などに結実する共同体論を構想することになるし，ハイデガーやヘルダーリンをめぐるラクー＝ラバルトの仕事もまた，ナンシーとの共著の延長線上に位置づけることが可能である。また，「われわれはいまなおロマン主

義によって開かれた時代に属している」と語るナンシーとラクー＝ラバルトの歴史観は，バディウやランシエールのそれと響き合うところがある。

以上，非常に簡略的ながら概観してきたように，いずれも同世代（1937 年生まれのバディウ以外は皆 1940 年生まれ）に属する現代フランス哲学の重鎮たちが，そのキャリアのある時期に（それぞれ独自の関心から）ロマン主義に接近し，そこから自らの思想の中核的な部分を抽出しているのは興味深い。バディウの芸術論については，たとえばエリー・デューリングが「プロトタイプ」という概念を打ち出すことで，バディウとは違った形で有限と無限との「別様の連関」を構想し，本邦でも注目された。一方で，こうした後続世代による批判的継承に比して，上述した「併走者」たちの議論とバディウ自身の議論を比較検討する試みについては，世界的に見てもいまだ稀である。今後の展開を注視するとともに，折を見て私自身取り組んでみたいとも思う。

執筆者について——
武田宙也（たけだひろなり）　1980 年生まれ。現在，京都大学准教授。専攻＝美学・芸術学。小社刊行の著書には，『ミシェル・フーコー　『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』（共著，2021 年）がある。

アラン・バディウ書誌抄

1. 水声社刊行の書籍

ベケット
――果てしなき欲望

西村和泉訳（2008 年）　存在の灰黒の中に光り輝く生――それを方法的苦行の絶え間ない努力によって我々に提示しようとするベケットの詩学的試みを踏まえ，独自かつ複数の切り口からテクストを非主流的に読解することで，他との類似的差異，ベケットの特異性を浮き彫りになる。旧来の陰鬱なベケット・イメージを鮮やかに反転させてみせた衝撃は，本書を通じて，なによりもベケットの作品の中で明快に響き渡る。［毎床玲音］

サルコジとは誰か？
――移民国家フランスの臨界点

榊原達哉訳（2009 年）　同時代の政治社会的事件について語る「状況」シリーズ第四巻。移民の少年を「社会のくず」と呼び，「暴動」を弾圧していたサルコジが 2007 年に大統領に当選した。その状況を分析し，バディウは様々な分断に抵抗するべく「唯一の世界が存在する」というテーゼに至る 8 つの実行可能なポイントを提示する。これらを可能とするコミュニズムはこれまでの意味を捉え返しながら，仮説として提示されなければならない。［松尾遼太郎］

愛の世紀

ニコラ・トリュオングとの共著，市川崇訳（2012 年）　「愛は新たに創造されなければならない」――ランボーの引用から始まる本書において，バディウは，最小のコミュニズムとしての愛を提起する。ラカンのいうようにセクシュアリティとは自己愛であり，「性的関係は存在しない」ならば，他者への「愛」はどのようにあり得るだろうか。「二者」であることの差異がもたらす，愛による根源的な世界の経験を，バディウはニコラ・トリュオングとの対話を通じて私たちに語る。［大矢悦子］

共産主義の理念

コスタス・ドゥズィーナス＋スラヴォイ・ジジェク編，長原豊監訳，沖公祐＋比嘉徹徳＋松本潤一郎訳（2012 年）　2000 年代末，自壊しつつも延命させられた資本主義。この矛盾に際して，我々は何をするべきか。当代の哲学者・思想家たちによる会議をもとに，アラン・バディウとスラヴォイ・ジジェクが中心となって編纂された論集。共産主義の〈理念〉を再生し，共産主義者に駆動する主体を与えること，これが我々の任務だとバディウは宣言する。「われわれにそれは可能です。ですからそれは義務でもあるのです。」『アラン・バディウ，自らの哲学を語る』と本書の併読は，読者にバディウの哲学とその情況の結びつきを示すだろう。［布施哲朗］

コミュニズムの仮説

市川崇訳（2013 年）　同時代の政治社会的事件について語る「状況」シリーズ第五巻。同時代といいながら，1968 年から 2008 年の 40 年にわたる論考・原稿を収録する。つまり，私たちは「いまだに，68 年 5 月の革命と同じ時代を生きている」のだ。そして，「自らを富ませよ」という資本主義の至上命令を拒む限り，「失敗」は訪れず，理念を保ち続けることができる。68 年 5 月当時の問題が未解決である以上，「コミュニズムに新たな意味を与える義務を負うのはわれわれである」。［松尾遼太郎］

議論して何になるのか

――ナショナル・アイデンティティ，イスラエル，68 年 5 月，コミュニズム

アラン・フィンケルクロートとの共著，的場寿光＋杉浦順子訳（2018 年）　アラン・バディウとアラン・フィンケルクロートという現代フランスを代表するふたりの思想家の間で行われた討論の記録。フランスのナショナリズムとユダヤ教，68 年 5 月，資本主義とコミュニズム，そしてイスラエル・パレスチナといった主題をめぐり，フランスを中心とした政治的状況やその歴史的背景に対する鋭い分析に基づいて異なる政治的立場から展開される両者の議論の応酬は，政治や経済の体制をもその射程に含む独自の思想の姿を生き生きと描く。［中谷碩岐］

推移的存在論

近藤和敬＋松井久訳（2018 年）　メイヤスーに代表される思弁的実在論に大きな影響を与えたことでも知られる，バディウの主著『存在と出来事』のエッセンスを凝縮した一冊。ハイデガー，ウィトゲンシュタイン，ドゥルーズ，スピノザといった哲学者たちとの対話，プラトンとカントの再読，そして圏論と集合論に代表される現代数学を議論の導きとして「一に還元されないラディカルな多の存在論」を思考するバディウ哲学のひとつの道筋を描く。［中谷碩岐］

思考する芸術

――非美学への手引き

坂口周輔訳（2021 年）　芸術, 詩, ダンス, 演劇, 映画についての 90 年代の論考が編纂された, バディウによる「非美学」のプロジェクト。哲学史において長らく議論されてきた芸術と哲学，詩と哲学の関係を再考し，新たなモデルを提示する。マラルメやペソアの詩，ベケットの散文といった様々な芸術作品の分析を通して，「芸術的布置」の探究の足跡をたどり，諸作品が生みだす特異的な一つの真理を記述する。芸術という思考の営為をめぐる，美学にも哲学にもとらわれない「非美学」の芸術論。［瀧口隆］

アラン・バディウ，自らの哲学を語る

近藤和敬訳（2023 年）　『存在と出来事』をはじめとする主著三部作において展開されたバディウの哲学を若者向けに平易に語り直す，バディウ自身による最良の入門書。バディウが提示する四つの哲学の条件の具体例やその哲学史との関係を論じた「出来事，真理，主体」，詩と数学についての洞察から哲学を再定義する「数学と詩情のあいだの哲学」，主著三部作において展開された自身の哲学体系について，伝統的な存在論及び現代数学との関係を論じた「存在論と数学」の三篇を収録する。［中谷碩岐］

2. その他の主な邦訳書

『ドゥルーズ――存在の喧騒』（鈴木創士訳，河出書房新社，1998 年）
『哲学宣言』（黒田昭信＋遠藤健太，藤原書店，2004 年）
『倫理――〈悪〉の意識についての試論』（長原豊＋松本潤一郎訳，河出書房新社，2004 年）
『聖パウロ――普遍主義の基礎』（長原豊＋松本潤一郎訳，河出書房新社，2004 年）
『来るべきデリダ――連続講演「追悼デリダ」の記録』（ピエール・ブルデューほかとの共著，藤本一勇監訳，明石書店，2007 年）
『世紀』（長原豊＋馬場智一＋松本潤一郎訳，藤原書店，2008 年）
『民主主義は，いま？――不可能な問いへの 8 つの思想的介入』（ジョルジョ・アガンベンほかとの共著，河村一郎ほか訳，以文社，2011 年）
『ワーグナー論』（長原豊訳，青土社，2012 年）
『人民とはなにか？』（共著，市川崇訳，以文社，2015 年）
『ラカン――反哲学 3　セミネール 1994-1995』（原和之訳，法政大学出版局，2019 年）
『存在と出来事』（藤本一勇訳，藤原書店，2019 年）
『哲学の条件』（藤本一勇訳，藤原書店，2021 年）

【連載】

ジュリアス・イーストマンのミニマリズム（2）：パーソナルなミニマル音楽

――ミニマル音楽の拡散と変容 9

高橋智子

ジュリアス・イーストマンの作品のアーカイヴ化を行っているメリー・ジェーン・リーチがまとめた作品リストによると，現在までに 54 の楽曲がイーストマンの作品として確認されている [(1)]。最も古いものはピアノ独奏曲の「インセクト・ソナタ（Insect Sonata）」（1962 年かそれ以前）で，この曲はカーティス音楽院在籍時に作曲されたと推測できる。これは「インセクト（insect）」――虫，昆虫，あるいは侮蔑的な意味で虫けら――という興味深いタイトルのピアノ曲だが，残念ながら楽譜も録音も残っていないため詳細は不明のままである。

前回，解説したように，作曲だけでなく楽器の演奏やパフォーマンスも行う「総合的な音楽家（the total musician）」をモットーとしたイーストマンはダンスや朗読の入ったシアター・ピースとも呼べる作品もいくつか残している。バッファロー大学在職中の 1970 年に作曲，上演された「月の無言の変化（The Moon's Silent Modulation）」はフルート，打楽器，2 台ピアノ，合唱，弦楽四重奏，朗読，ダンスの編成。朗読の詩はイーストマンの自作で，彼は太陽と地球との衝突を通して人間のエゴイズムを描き出す寓話的な物語を創作した [(2)]。この作品の音楽部分は「フーガのように組織化された音のブロック」[(3)] による図形楽譜で書かれている。1970 年当時，図形楽譜は前衛音楽や実験音楽にとってすっかり常套手段となり，何ら特別なことではなくなっていた。イーストマンも数ある記譜法の 1 つとして図形楽譜を書いたのだろう。タイトルと編成から，このシアター・ピースはアルノルト・シェーンベルクの「月に憑かれたピエロ（Pierrot lunaire）」（1912）を想起させるが，イーストマンがこの曲に触れた発言は今のところ見つかっていない。

図形楽譜の使用以外にもイーストマンと 60 年代，70 年代の前衛音楽や実験音楽とのかかわりを垣間見ることができる。8 台のメトロノームとダンサーのための「ウッド・イン・タイム（Wood in Time）」（1972）は，100 台のメトロノームを用いるジョルジ・リゲティの「ポエム・サンフォニック（Poème symphonique）」（1962）のパロディだったことを，バッファロー大学時代のイーストマンの同僚の 1 人が証言している [(4)]。さらには，イーストマンがこの曲で 8 台のメトロノームの間に生じる位相ずれプロセスを活かそうとしたならば，高い場所から吊るされた 3 つかそれ以上のマイクの揺れ動きに着目したスティーヴ・ライヒの「振り子の音楽（Pendulum Music）」（1968）との関係も想像できる。イーストマンの音楽にはジャズの即興が影響していることを前回述べたが，他の作曲家の場合と同様に，彼も過去や同時代の音楽の動向を注視していたはずだ。

器楽曲，歌曲，シアター・ピースなど幅広い種類の作品を書いていたイーストマンの音楽は 1973 年頃からミニマル音楽の様式と接近し始める。「ステイ・オン・イット（Stay On It）」は彼のミニマリズムの萌芽を見ることができる楽曲だ。1973 年に作曲されたこの曲は，イーストマン自身もメンバーだったバッファロー大学のクリエイティヴ・アソシエイツによって同年に初演された。この曲は編成や楽器が指定されていないが，声（声種の指定なし），ピアノ，ヴァイオリン，クラリネット，サキソフォン 2，マリンバ，シロフォンのアンサンブルで初演された。声とピアノはイーストマンが演奏した。自由な編成とはいえ，初演時の編成に倣って声，ピアノ，鍵盤打楽器を必須とする解釈も

ある。スコアには短いモティーフやパターンが記されており，演奏者はこれらを繰り返して曲を進めて行くのだが，オクターヴや反復回数は奏者の任意である。スコアには書かれていない音やパターンもとり入れた即興的な要素の強い演奏も可能で，この曲の楽譜はジャズの記譜法に近い体裁をとる。このような特性から，この曲の記譜法は演奏家の裁量が多くを占めるテリー・ライリーの「イン・シー（In C）」に代表される「開かれた形式（open form）」の一種と見なすことができる。当時のニューヨークのダウンタウンの音楽シーンでは作曲者も演奏者を兼ねていたので[(5)]，また，ロックやジャズなど，楽譜至上主義ではない音楽の出身者もこのコミュニティに多くいたので，彼らの音楽の楽譜には一般的な楽譜に期待される詳細な情報を記譜する必要はなかったこともイーストマンの「ルーズな」記譜法を生み出した要因である。一方，正統な解釈を求めて過去の録音の採譜や，生前のイーストマンと演奏した奏者への聞き取りといった作業から演奏を構築することもある[(6)]。

全てのパートのユニゾンによる陽気な回転状のモティーフの反復で始まる「ステイ・オン・イット」の演奏時間は約 25 分。このモティーフが数回繰り返されると，声のパートが「Stay on it」と歌い出す。心躍るような朗らかな雰囲気は曲の開始後もしばらく続くが，徐々に各パートがモティーフを変形させて行くにつれて曲調がゆっくりと変化する。いくつかの異なる種類のモティーフの数々，持続音，グリッサンドのようなすばやいパッセージなどが方々で鳴らされ，躍動感に満ちたテクスチュアは混沌の様相を呈する。そして，突如，冒頭の回転状のモティーフがユニゾンで繰り返されて音楽は落ち着きを取り戻すが，それは長く続かず，アンサンブルは再び混沌に向かう。このような平穏さと混沌との交替を何度も経て，この曲は終わる。曲の終わり方にもいくつかのパターンがあり，CD セット『アンジャスト・マレイズ――ジュリアス・イーストマン（*Unjust Malaise: Julius Eastman*）』に収録されている，イーストマンが参加した演奏では最後の数分のところでタンバリンによるパルスが刻まれる。

反復を主体とする「ステイ・オン・イット」は，ミニマル音楽と捉えて間違いないだろう。カイル・ギャンはこの曲が 1973 年に作曲されたこと，つまりスティーヴ・ライヒの「18 人の音楽家のための音楽（Music for 18 Musicians）」（1976）や，フィリップ・グラスの「12 部からなる音楽（Music in Twelve Parts）」（1974）と「浜辺のアインシュタイン（Einstein on the Beach）」（1976）といったポストミニマル音楽の幕開けとされる楽曲の数々が世に出る前に発表された曲だったことに着目する[(7)]。「ステイ・オン・イット」が書かれた 1973 年当時，ミニマル音楽はまだ黎明期の原理主義的な状況に留まったままで，一面的な概念主義と抽象的なパターンに固執していた[(8)]。例えば，「マレット楽器，声，オルガンのための音楽（Music for Mallet Instruments, Voices and Organ）」（1973）や「6 台のピアノ（Six Pianos）」（1973）など，この曲とほぼ同時期のライヒの楽曲を見てみると，パターン反復を主とするライヒのミニマリズム書法がすっかり確立されていることがわかる。この数年後，彼は「18 人の音楽家のための音楽」によってさらに様式的な発展を遂げたポストミニマル音楽の段階に入る。パターン反復だけでなく和声の響きも重視した新たなミニマル音楽の様式が始まったのだった。だが，これはあくまでも「正史」のミニマル音楽観であって，イーストマンは既に 1973 年に「ステイ・オン・イット」によってポスト・ミニマル音楽とポストミニマル音楽双方[(9)]を先取りしていた。

初期のパターン反復型のミニマル音楽は物語性や劇的な要素を一切排した「反復のための反復」によって粛々と，そして漸次的に変容していく音楽を特徴とする。この無機質さと冷淡さが他の音楽と一線を画す特徴だと言ってもよいだろう。だが，イーストマンのミニマル音楽は違う。無調や音列技法の音楽と比べると，調性の名残がある従来のミニマル音楽もだいぶ聴きやすいが，イーストマンの場合はそれを上回る聴きやすさである。「ステイ・オン・イット」のモティーフはとてもポップで親

しみやすい。このモティーフのシンコペーションがアフロ・キューバン系音楽の基本となるリズム・パターン，ソン・クラーベ（son clave）に似ていることが指摘されている[10]。彼はジャズ，アフロ・キューバン系音楽などを堂々と自分の音楽に取り入れて，いくつかの音楽ジャンルを混ぜ合わせてみせた。従来のミニマル音楽よりもさらにポップで親しみやすいミニマル音楽を彼は作ったのである。1980 年代以降，ミニマル音楽はアンビエント音楽やテクノやハウスにも波及するが，1973 年代半ばにイーストマンは誰よりも早くジャンルの境界を飛び越えようとしていた。

声のパートも「ステイ・オン・イット」を強く印象付ける。イーストマン自身の演奏を聴くと[11]，彼の声は激情的だ。彼の歌は自分の性格や感情を曝け出して咆哮しているようにも聴こえる。冷静にパターンを繰り返す従来のミニマル音楽とは正反対の，個人的で劇的な世界がそこに広がっている。1976 年にグラスが「浜辺のアインシュタイン（Einstein on the Beach）」でミニマル音楽にオペラとダンスを接近させた。1988 年にライヒは「ディファレント・トレインズ（Different Trains）」でミニマル音楽にホロコーストの歴史物語を紡がせた。イーストマンは彼らに先立って，個人的で，劇的で，物語的な要素を伴うミニマル音楽を実践していた。彼の「パーソナルな」ミニマル音楽は「ニガー・シリーズ（Nigger series）」と呼ばれる楽曲でますます顕著になる。

「ニガー・シリーズ」は「クレイジー・ニガー（Crazy Nigger）」（1978），「エヴィル・ニガー（Evil Nigger）」（1978），「ゲイ・ゲリラ（Gay Guerrilla）」（1979）からなる。3 曲とも編成が指定されていないが，4 台ピアノで演奏されることが多い。4 台ピアノの編成は，初期ミニマル音楽に影響を与えたと言われている，音響のゆらぎと消失に焦点を当てたモートン・フェルドマンの「4 台のピアノのための小品（Piece for Four Pianos）」（1957）を思い出させる。また，同種の楽器を複数重ねる編成は 1960 年代，70 年代のライヒの楽曲にもいくつか見られる。イーストマン自身による演奏も 4 台ピアノで行われており，彼にとってこの編成はミニマル音楽を象徴するものなのかもしれない。音が去った後の静けさを追求したフェルドマンの 4 台ピアノとは対照的に，イーストマンの 4 台ピアノは 3 曲とも力強い打鍵を執拗に繰り返して轟音の海を作り出す。イーストマンがリース・チャタムやグレン・ブランカに並ぶ「轟音系ミニマル音楽」と称されるのも，この「ニガー・シリーズ」の大音量ゆえのことだ。

3 曲ともに記譜法も「ステイ・オン・イット」と同じく，言葉による指示と基本パターンがラフに記されただけだ。小節数や反復回数ではなくて具体的な時間（「〜分〜秒」）がスコアの随所に記されており，演奏者はこの時間表示に即してパターンを繰り返し，時に即興的な演奏も織り交ぜながら曲を進める。イーストマンはこれらの曲で用いられている彼独自の反復技法について，「オーガニック・ミュージック」の概念を提唱している。

> どこかのパートの 3 番目のパートはそれに先立つ 2 つのパートの情報を含んでいなければならず，そうして進んで行くのだ……［……］だが，それらはまだ完成していない。全てのセクションにそれに先立つセクション全部の情報を積み込ませ，論理的に一歩ずつ段階を経てそれらの情報を持ち運ぶ試みがそこで行われているのだ。[12]

ある部分やパターンは先行するパターンの要素を取り込んで加算的，付加的に生み出される。この考え方はグラスの加算プロセスの技法とほぼ同じに見えるが，イーストマンはこれを「オーガニック・ミュージック」と名付けた。彼の言う「オーガニック」とは，音が有機的に結びついて連鎖するようなイメージだろうか。だが，「オーガニック・ミュージック」はイーストマンの説明通りに実践されているわけではないようだ。ギャンによると，イーストマンの反復は 1 オクターヴ中の全 12 音が一

度に鳴り響く瞬間が来るまで，演奏者はパターンの繰り返しの中で音高を加えて行く[13]。こうして膨れ上がった音のテクスチュアにイーストマンは「オーガニック・ミュージック」のイメージを重ねたのかもしれない。スコアに記された1つの旋律が全ての調で演奏されるまで繰り返されることもあり，後にも先にもこんなことをやったのはイーストマンただ1人だろうとギャンは語っている[14]。

「ニガー・シリーズ」について，そのタイトルに触れないわけにはいかない。1980年1月にシカゴのノース・ウェスタン大学で，このシリーズ全3曲が演奏された。タイトルにNワード（黒人に対する差別表現）が含まれることから，大学側の判断により，当日配布されたプログラムにはタイトルが印刷されなかった。代わりに，イーストマンが演奏前に曲のタイトルとその意図を解説した。彼はなぜ「ニガー」という語をタイトルに付けたのだろうか。

> 今，この特別な言葉を使う理由は，私が思うに，これ（nigger）にこの言葉にまつわる「基本的なこと」が備わっているからだ。つまり，あらゆる場面において，当然ながら最初の黒人（nigger）たちはその土地の黒人だった。アメリカの経済システムの基礎は彼らに依拠していた。地域の黒人の存在抜きにして私たちはこれほど強力で大きな経済力を持てなかっただろう。だから，私は彼らを最初の偉大な黒人たち，地元の黒人たちと呼んでいる。「ニガー」という言葉は私にとって基本的なことを意味する。さらにこの言葉は，根底にあるものや根源的なものを獲得している人間や事物を，また，表層的なものや私たちが優雅だと見なすようなものを忌避する人間や事物のことも言う。[15]

彼の言葉に素直に耳を傾けると，イーストマンは「ニガー」に自身のアイデンティティを形成している根源的なものを投影していたのだろう。もうひとつ，彼のアイデンティティに関わる事柄を忘れてはならない。彼はゲイである。「ニガー・シリーズ」の3番目「ゲイ・ゲリラ」のタイトルについてもイーストマンはこの時の演奏会で説明している。

> ゲリラとは，どんなことに対してでも，1つの考えのために命を捧げる人である。もしもなんらかの理想があるならば，そして，それが壮大なものならば，その運動に携わる人々は自身の血をそこに捧げるだろう。なぜなら，血を流すことなしに運動はあり得ないからだ。こういう理由で，もしも要請があれば，私は彼らの一員になりたい。こんな願いを込めて私は「ゲイ・ゲリラ」という言葉を使うのだ。[16]

彼は，自身も含めたゲイの人々の人権や様々な権利闘争に対する連帯の意思をここに強く表明している。静かに始まり，やがて轟音となる「ゲイ・ゲリラ」に，彼の内面に渦巻く情念を聴くことができる。しかし，私たちはそれを正確には理解できないだろうし，共感もできないだろう。なぜなら，それは彼にしか本当のことはわからない「根源的なもの」だからだ。

ミニマル音楽は表現や感情を取り除いた機械的で冷淡な音楽だと思われてきた。このようなイメージは決して間違いではなく，ミニマル音楽の様式的な最大の特徴とされている。イーストマンはミニマル音楽の従来のイメージを覆した。彼は赤裸々に自身の感情やアイデンティティを音楽に投影し，非常にパーソナルなミニマル音楽のあり方を確立した唯一無二の音楽家である。

次回は，1990年代から現在にいたるまでのライヒの音楽の動向を探りながら，ポストミニマルの

さらにその後について考察する。

注

(1)　メリー・ジェーン・リーチのウェブサイトからダウンロードできる。https://www.mjleach.com/program notes/Eastman-Works.pdf (Accessed September 2023)

(2)　Tom Putnam, "Julius Eastman Works Scheduled," *Buffalo Courier Express*, April 19, 1970.

(3)　Ibid.

(4)　Matthew Mendez, ""That Piece Does Not Exist Without Julius": Still Staying On *Stay On It*," *Gay Guerrilla: Julius Eastman and His Music*, edited by Renée Levine Packer and Mary Jane Leach, Rochester: University of Rochester Press, 2015, 155.

(5)　Kyle Gann, ""Damn Outrageous" The Music of Julius Eastman," liner notes for *Unjust Malaise: Julius Eastman*, New World Records 80638-2, 2005, 9.

(6)　アンサンブル・グループ Ne(x) は 1973 年の初演時の演奏を採譜し，イーストマンと共にこの曲を演奏した作曲家・指揮者・フルート奏者ペトル・コティックの助言をもとに演奏譜を作成した。このスコアは Stay_On_It_score_0807.pdf (Accessed October 2023) からダウンロードできる。

(7)　Gann, op. cit., 9.

(8)　Ibid., 9.

(9)　本連載では「ポスト・ミニマル音楽」と「ポストミニマル音楽」を意図的に使い分けている。単なる時系列上の「ポスト」という意味のミニマル音楽を「ポスト・ミニマル音楽」として，初期のミニマル音楽から発展した様式上の「ポスト」という意味のミニマル音楽を「ポストミニマル音楽」として表記する。詳しくは本連載第 3 回参照。

(10)　Mendez, op. cit., 159.

(11)　1974 年，バッファロー大学クリエイティヴ・アソシエイツのヨーロッパ・ツアーの一環としてグラスゴー大学で行われた演奏を試聴できる。この時イーストマンはピアノと声を担当。https://vimeo.com/75197042 (Accessed October 2023)

(12)　Kyle Gann, "Julius Eastman and the Conception of "Organic Music,"" *Gay Guerrilla: Julius Eastman and His Music*, edited by Renée Levine Packer and Mary Jane Leach, Rochester: University of Rochester Press, 2015, 98.

(13)　Ibid., 98.

(14)　Ibid., 98.

(15)　John Smigielski, "The Northwestern University Piano Pieces," *Performing the Music of Julius Eastman*, edited and published by University at Buffalo Music Library, 2017, 33. バッファロー大学図書館のウェブサイトからダウンロードできる。https://library2.buffalo.edu/music/collections/detail.html?ID=16 (Accessed October 2023)

(16)　Ibid., 35.

執筆者について――
高橋智子（たかはしともこ）　1978 年生まれ。専攻＝アメリカ実験音楽。小社刊行の著書には，『モートン・フェルドマン――〈抽象的な音〉の冒険』（2022 年）がある。

水声社の新刊

（2023 / 11 / 30）

【12 月の新刊（予定）】

マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読む《水声文庫》

――フェミニスト・ディストピアを越えて

加藤めぐみ・中村麻美編　【12.11 発売】

▶男性優位の独裁国家を描く暗澹たるディストピア文学が、なぜ今日、フェミニスト・プロテスト文化の象徴として耳目を集めるのか。現実世界の諸相を束ねて生み出された物語世界に、現在そして未来を生き抜くための希望を探る。

四六判上製／ 326 頁／ 3500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0685-0

今、絵画について考える

長屋光枝＋杉本渚＋大島徹也＋沢山遼＋亀田晃輔＋加藤有希子＋小野寺奈津＋平倉圭　【12.18 発売】

▶画家はいかにして絵画空間をつくり出し、観者はそれをどう受け止めるのか。作品の背後に潜む画家の意図に鋭く迫り、錯綜する批評言説を丁寧に読み解くことで、秘められた絵画の力を解放し、新たな美術史の姿を描き出す。

四六判上製／ 288 頁＋別丁 8 頁／ 2800 円＋税　ISBN：978-4-8010-0771-0

接続する柳田國男

大塚英志編　【12.18 発売】

▶反アカデミズムの総合知として誕生した民俗学は、柳田國男独自の歴史観と方法論を宿していた。社会改革に向けた情報インフラの構築と市民教育に取り組み、メディア論的思考で事象を捉えた柳田民俗学の可能性を究明する！

A5 判上製／ 439 頁／ 6500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0777-2

或る英国俳優の書棚

野村悠里 【12.28 発売】

▶英国の演劇史に名を残すこともなかった《或る俳優》がスクラップブックに切り貼りした新聞、絵葉書、手紙、写真など多様な断片から知られざる人生を復元し、製本史からそのコレクションに光をあてる。

A5 判上製／ 268 頁＋別丁カラー 24 頁／ 4000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0758-1

書影準備中

マルグリット・ド・ヴァロワ回想録

鍛治義弘訳 【12.28 発売】

男たちを破滅させた〈悪女〉と伝えられる一方で、高い知性と教養を備え、カトリックとユグノーの狭間で外交手腕を発揮したヴァロワ朝最後の王妃マルグリット・ド・ヴァロワ。フランス・ルネサンスを代表する〈自伝〉作品。

A5 判上製／ 248 頁／ 3500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0773-4

書影準備中

アメリコ・カストロ

本田誠二 【12.28 発売】

▶マルセル・プルーストと同じ 1871 年に生まれた天才芸術家マリアノ・フォルチュニ。作家は彼の創造する《衣装》をいかに効果的に織り込むか、その効果を周到に計算していた……。彼の絢爛たる衣装がもつ記憶の喚起力を紡ぎ出す。

四六判上製／ 162 頁／ 2500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0754-3

書影準備中

我が魂の航海術——'67-'69 時代霊と遊ぶ

川崎三木男 【12.28 発売】

▶日本が熱かった時代をかけぬけた著者が、半世紀をへて学生運動、紅テント、美学校、オキナワと彷徨した日々をリアルに活写。全共闘世代は、時代とどう交歓したのか。その思想と行動の軌跡！

四六判上製／ 208 頁／ 2000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0788-3

震える物質――物の政治的エコロジー

ジェーン・ベネット／林道郎訳　【12.28 発売】

▶不活発で受動的だとされてきた物質のもつ媒介作用を豊富な例から析出し、人間と人間以外のものが連鎖・協働する世界＝アセンブリッジを思い描く。物＝生命の新たなポリティカル・エコロジー。

四六判上製／ 321 頁／ 3500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0728-4

書影準備中

関係性の美学

ニコラ・ブリオー／辻憲行訳　【12.28 発売】

▶参加、出会い、待ち合わせ、労働行為や商取引までをも形式化する捉えどころのない作品たちは、いかにして誕生したのか。芸術理論の空白のただなかで、全面的な商品化へ向かいつつある現在のアートを読み解くための必携書！

四六判上製／ 256 頁／ 3200 円＋税　ISBN：978-4-8010-0782-6

書影準備中

労働と身体の大衆文化

大塚英志・星野幸代編　【12.28 発売】

▶翼賛体制下でプロパガンダ大衆文化を享受した国民の身体は、動員解除後、何を求め、また大量に生産された娯楽はどこへいったのか。戦時下の舞台・芸能・合唱・ラジオ・映画を横断し、戦後の大衆文化へと至る伏流を探る。

A5 判上製／ 318 頁／ 5500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0778-9

書影準備中

ハザール――幻のユダヤ教騎馬民族国家

城田俊　【12.28 発売】

▶トルコ系でありながらユダヤ教を国教とし、ユーラシアの広大な領域を支配して栄華を極めるも、わずかな文献と遺跡のみを残して消滅した騎馬民族を彩る数多の神話の検証に挑む、ハザールについての最も詳細な解説書。

四六判上製／ 448 頁／ 4000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0775-6

書影準備中

摩擦《人類学の転回》

――グローバル・コネクションの民族誌

アナ・ツィン／石橋弘之・岩原紘伊・寺内大左・難波美芸・箕曲在弘訳【12.28 発売】

▶インドネシアの南カリマンタンに拡がる美しい熱帯雨林を舞台に、あらゆる差異を抹消し地球をひとつにしようとする力学と、さまざまなアクターの偶発的な《協働》が織りなす、断片的なもののエスノグラフィ。

四六判上製／ 480 頁／ 5200 円＋税　ISBN：978-4-8010-0766-6

書影準備中

聖なる自己《人類学の転回》

――カリスマ派の癒しの文化現象学

トーマス・J・チョルダッシュ／飯田淳子・島薗洋介・川田牧人監訳　【12.28 発売】

▶集会のさなか気を失ったり、異言や預言を唱えたりする信徒たちの身には、なにが起こっているのか――。カリスマ派キリスト教の宗教体験をめぐって、身体性の次元から人間の根源にせまる、《聖なるもの》の民族誌。

四六判上製／ 480 頁／ 6000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0770-3

書影準備中

【11 月の新刊（既刊）**】**

ブランショとともに

執筆＝郷原佳以＋安原伸一朗＋石井洋二郎＋髙山花子＋伊藤亮太＋門間広明＋森元庸介＋千葉文夫＋石川学　【11.6 発売】

▶戦後最大のフランスの文芸批評家モーリス・ブランショへの日本人研究者・批評家たちからの 15 編のオマージュ！《読むのが困難なものこそ読むに価する唯一のものだ。》（M.B.）

四六判アンカット無製本／ 80 頁／ 1000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0768-0

フォルチュニのマント《批評の小径》

――『失われた時を求めて』をめぐる衣服の記憶

ジェラール・マセ／福田桃子訳　【11.17 発売】

▶マルセル・プルーストと同じ 1871 年に生まれた天才芸術家マリアノ・フォルチュニ。作家は彼の創造する《衣装》をいかに効果的に織り込むか、その効果を周到に計算していた……。彼の絢爛たる衣装がもつ記憶の喚起力を紡ぎ出す。

四六判上製／ 162 頁／ 2500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0754-3

モードで読み解くフランス文学

《水声文庫》

村田京子　【11.17 発売】

▶フランス革命と服飾（バルザック）、変装する女性（サンド）、オート・クチュールの世界（ゴンクール）、女の欲望を掻き立てるデパート（ゾラ）など、小説に登場するモードを通して 19 世紀のフランス社会を読み解く。

四六判上製／ 344 頁＋カラー別丁図版 8 頁／ 2700 円＋税　ISBN：978-4-8010-0753-6

古代教会スラヴ語入門【選文集】

原求作　【11.20 発売】

▶全スラヴ諸語の書き言葉の基礎となった言語の文法を解き明かす『古代教会スラヴ語入門』の別冊＝選文集。詳細な注釈付きの福音書テクスト 12 篇と語彙集を収め、実際の表現に触れながら読解の実践力を身につける。

A5 判並製／ 163 頁／ 3000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0746-8

さらばボゴタ《フィクションの楽しみ》

アンドレ・シュヴァルツ＝バルト＋シモーヌ・シュヴァルツ＝バルト／中里まき子訳　【11.24 発売】

▶火山の噴火でカリブ海の故郷を追われ、世界を彷徨し、最期にパリの施設にたどり着いたマリオットが紡ぐ、ある一族の歴史＝人生。奴隷たちの先頭に立って戦い、出産後すぐに処刑された黒人女性から始まる家族の物語。

四六判上製／ 237 頁／ 2700 円＋税　ISBN：978-4-8010-0786-4

戦後フランスの前衛たち——言葉とイメージの実験史

進藤久乃編 【11.24 発売】

▶大戦後の芸術運動を俯瞰する第一部、前衛周辺の作家たちを論じる第二部、詩に革新をもたらした音声詩、視覚詩の展開を見据える第三部を通して、戦後フランスの前衛運動の見取図を描き出す。

A5 判上製／ 368 頁／ 6000 円＋税　ISBN：978-4-8010-0755-0

ドゥルーズ＝ガタリと私たち

——言語表現と生成変化の哲学

平田公威 【11.24 発売】

▶同一性を解体する《差異》や他なるものへの生成変化を称揚したドゥルーズ＝ガタリの哲学は、主体なき思想なのか——。ソシュール以降の言語学者が与えた衝撃を分析し、生成変化に至る理路を照らしだす。

A5 判上製／ 320 頁／ 4500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0769-7

DUB 論

マイケル・ヴィール／森本幸代訳 【11.27 発売】

▶遠く深くとばされるエコー、靄のような音響、空間を揺さぶる低音……。ジャマイカのエンジニアによって生みだされ、世界のポピュラー音楽を変えた「ダブ」の輪郭を、豊富な歴史的資料と鋭い楽曲分析から描きだす。

四六判並製／ 448 頁／ 3500 円＋税　ISBN：978-4-8010-0766-6

水声社

東京都文京区小石川 2-7-5　tel. 03-3818-6040 ／ fax. 03-3818-2437　eigyo-bu@suiseisha.net

ブックカフェ

本の庭
le Jardin des livres

本の庭

緑と本にかこまれて，静かな憩いのひとときを。
ブックカフェ〈本の庭〉がオープンしました。水声社のベストセラー（？）やロングセラー，シリーズ本など本を手に取ってお読みいただきながら，香り高い珈琲や，ホットジンジャー，プリン，シフォンケーキなどとともにゆったりとお過ごしいただけます。トータルデザインやメニュー開発もスタッフで行っています。現役芸大生作成のマグカップ，住宅地の片隅の緑の木々も読書や会話のお供をいたします。
カフェに並んでいる水声社の本はカフェでお読みいただくことも，お買い求めいただくこともできます。カフェに並んでいない本を図書目録からご注文いただくこともできます（カフェにお取り寄せすることも，ご自宅にお送りすることも可能です）。新刊書は本屋さんに配本される 1 週間ほど前から販売しています。
営業時間：水・木・金・土曜日の 11 時から 17 時まで。

本の庭
le Jardin des livres

大田区山王 1-22-16　〒 143-0023　tel. 070-4171-0860（営業時間中のみ）

（広告）